

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年 5月10日現在

機関番号：24303

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2009～2011

課題番号：21791144

研究課題名（和文）

育児期の女性における不安・抑うつと虐待危険性に関する精神医学的研究

研究課題名（英文） Psychiatric Research Regarding Postpartum Depression, Parenting Stress and the Risk of Child Abuse

研究代表者

崔 炯仁 (CHOI HYUNGIN)

京都府立医科大学・大学院医学研究科・助教

研究者番号：90398397

研究成果の概要（和文）：

育児期女性 262 名を対象として子どもの月齢が 3-12 ヶ月、18-28 ヶ月時に自記式調査票による調査を行い 2 回の結果を比較し以下の知見が得られた。

1. 産後うつは従来から不安特性の高さと関連すると言われるが、高い不安特性をもつ女性の産後うつは子の分離個体化期（18-24 ヶ月）にかけて改善した。
2. 幼少時の母親からの養護が良好であった群、ボーダーラインパーソナリティ（以下 BP）傾向のない群は子の分離個体化期にかけて抑うつが改善した。一方幼少期母親養護が乏しかった群は抑うつが悪化し、BP 傾向を有する群の抑うつは高いレベルにとどまった。これらの所見は、彼女らが子の分離への動きが自分への攻撃や陰性感情に基づいた行動と捉え、見捨てられ抑うつを呈するという力動的背景などいくつかの心理的要因が推定された。
3. これらの結果から乳児期の母親検診において母親の心理特徴を理解することによりその後のうつの悪化などの推移をある程度推測できることができ、母子保健現場において有用な情報提供や対応を行うことができると考察された。

研究成果の概要（英文）：

Data of this study were collected during 0-year-old baby check-ups and a follow-up investigation in Japan, and 262 participants were included in the analysis.

1. The high anxiety trait groups exhibited markedly higher postpartum depression scores but showed reduced depression scores during their children's separation-individuation period compared with the postpartum period.
2. Mothers with low childhood maternal care become more depressive during their children's separation-individuation period compared with the postpartum period. In the same manner, the mothers with borderline personality trait did not exhibit improved depression. It implies that they could feel loss of the complete union with their children and showed abandonment depression.
3. Thus, it is presumed that these mothers need to be supported mentally, not only during the postpartum period but also throughout the children's separation-individuation period, to allow them to adjust to their children's separation.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,400,000	420,000	1,820,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
年度			
年度			
総計	3,200,000	960,000	4,160,000

研究分野：医歯薬学

科研費の分科・細目：内科系臨床医学・精神神経科学

キーワード：産後うつ病、育児不安、虐待、パーソナリティ障害、分離個体化、ボンディング障害、アンケート

1. 研究開始当初の背景

産後うつ病は近年になり大きく注目されるようになり、種々の調査研究では13・20%と非常に多くの母親に見られる病態である。一方で子ども虐待の国内相談対応件数は2008年度に42,664件と10年間で約4倍に増加するなど社会問題化している。家族関係・対人関係・地域関係の希薄化などからますます孤立する母子を守り、育児環境を整備する上で育児不安、抑うつ等の解明、子ども虐待の予防が急務である。

代表研究者は前研究「育児期の女性における不安・抑うつに関する精神医学的研究（以下、前研究）」において426名の育児期女性のご協力をいただき、産後うつと子ども虐待は直接には関連せず、その共通の背景にボンディング障害が存在すること、産後うつ関連因子としては心配過剰傾向など低不安耐性がより重要であることなどを明らかにした。しかし臨床現場では育児期女性のうつが子どもが1・2歳を超えた時期に悪化する例も多く、虐待に関しては乳幼児期通じて存在する問題であり、前研究で認めた育児期女性の心理的特徴の推移を観察する必要があった。

2. 研究の目的

産後うつの研究は産後6・8週までの調査によるものがほとんどで、12ヶ月までのものが少数あるに過ぎない。12ヶ月を超えた調査はいずれも産後うつがその後のパラメーターに与えた影響を計測したものであり、うつ等の推移を観察した研究は皆無に等しい。そこで研究代表者らは育児期女性のうつ等の推移を調査し、これを改善／悪化させる女性の心理社会的特徴を解明するため、特に子の分離個体化期（18・24ヶ月）に焦点を当て、この時期に行った追跡調査による研究を行った。

3. 研究の方法

複数都市における乳児検診に来所した母親対象に、アンケート配布による調査を実施した（前研究、有効回答数426名）。この回答者に対して子どもの18～24ヶ月時に追跡調査を実施し、2回とも同意、解析可能な回答を得た262名について解析を行った。初回アンケートは1)オリジナルの質問紙、2)Zung抑うつ自己評価票(ZSDS)、3) State Trait Anxiety Inventory(STAI)、4) Parental Bonding Instrument(PBI)、5) Borderline Scale Index、6)虐待行動調査票などにより構成し、追跡調査は1)、2)、6)により構成した。6)虐待行動調査票結果の推移については現在解析中であることから、今回報告書では割愛する。2回のZSDS結果について対応のあるt検定を行い、次に他の各尺度において測定した特性不安、状態不安、両親養護・過保護因子得点、共依存、ボーダーライン・パーソナリティ(以下BP)傾向の得点によって2群に分け、各群、各回間のZSDSの得点についてt検定を行った。2) STAI、3) PBIの各下位尺度、4) BSIの得点の高低によって各2群に分類し、各群ZSDS得点間でt検定を行った。その後各群のZSDS得点の産後→分離期の推移について対応のあるサンプルのt検定を行った。その他属性（哺育方法、年齢、初産/経産、経済状況など）についても比較を行った。本研究は京都府立医科大学医学倫理審査委員会承認（申請番号C-183号）のもとに実施した。解析にはSPSS 16.0J for Windowsを使用した。

4. 研究成果

子の月齢は1回目が7.0±3.24ヶ月（3-12ヶ月）、2回目が21.8±2.35ヶ月（18-28ヶ月）であった。ZSDS得点は1回目40.6（SD7.88）、2回目40.1（SD8.74）であった。（表1）対応のあるt検定において2回の結果に有

意差は見られなかった。ZSDS \geq 50 の中等度以上抑うつと判定されたのは262人中それぞれ1回目34名(13.0%)、2回目32名(12.2%)であった。

表1
初回・追跡時の子の月齢と母親の抑うつ得点

調査	初回(産後期)	追跡(分離期)	差
子の月齢(ヶ月)	7.0 \pm 3.24 Range 3-12	21.8 \pm 2.35 Range 18-28	
ZSDS 抑うつ	40.64 \pm 7.88	40.10 \pm 8.74	P=0.187 ns

各尺度得点は以下の通りで、STAI 以外のカットオフ得点は+1SD 値を基準に独自に設定した。(表2)

表2
各心理尺度得点と設定カットオフ得点

尺度(下位尺度)	平均	SD	カットオフ
STAI 特性不安	40.80	9.57	49/ 50
状態不安	40.60	9.54	49/ 50
PBI 父親養護	23.83	8.62	17/ 16
父親過保護	9.22	6.56	15/ 16
母親養護	28.39	7.34	22/ 21
母親過保護	10.12	7.97	16/ 17
BSI B P傾向	6.30	8.74	7/ 8

各尺度得点を独自に設定したカットオフ得点で2群分類し、2群間でt検定により比較、各群を1回目と2回目に対応のあるt検定により比較した結果(増減)を表3に示す。

表3
尺度得点により分類した2群の抑うつ得点の推移と群間比較の結果(主なもののみ)

尺度	下位尺度	N(人)	ZSDS		
			初回産後期	追跡分離期	増減(p)
STAI	高不安特性	47	50.7	47.6	** 0.009
	低不安特性	215	38.4	38.4	0.97
	群間(p)		*** <0.000	*** <0.000	
STAI	高状態不安	44	50.3	48.0	** 0.044
	低状態不安	218	38.6	38.4	0.57
	群間(p)		*** <0.000	*** <0.000	
PBI	低母親養護	47	44.9	46.9	* 0.032
	高母親養護	215	39.7	38.6	* 0.013
	群間(p)		*** <0.000	*** <0.000	
BSI	BP傾向あり	71	47.6	48.9	0.17
	BP傾向なし	191	38.1	36.9	* 0.021
	群間(p)		*** <0.000	*** <0.000	
哺育方法	ミルク・混合	89	40.2	41.3	** 0.044
	母乳	173	40.9	39.5	0.97
	群間(p)		0.55	0.13	
経済状況	困窮感あり	64	42.8	43.5	0.13
	困窮感なし	202	40.0	39.0	** 0.007
	群間(p)		* 0.03	** 0.001	

p* $<$ 0.05, p** $<$ 0.01, p*** $<$ 0.001

抑うつ得点の各群比較では、すべての心理尺度で抑うつ得点に有意差が見られた。状況では、経済困窮感有り/無し群間で抑うつに有意差が見られた。母乳/ミルク・混合哺育間では有意差は見られなかった。

分類された群の2回の抑うつ得点を比較した結果、STAI 高不安特性群、高状態不安群、PBI 母親養護高得点群、非BP傾向群で有意に抑うつが改善し、PBI 母親養護低得点群では有意に悪化した。特に重要な結果について、グラフにて示す。

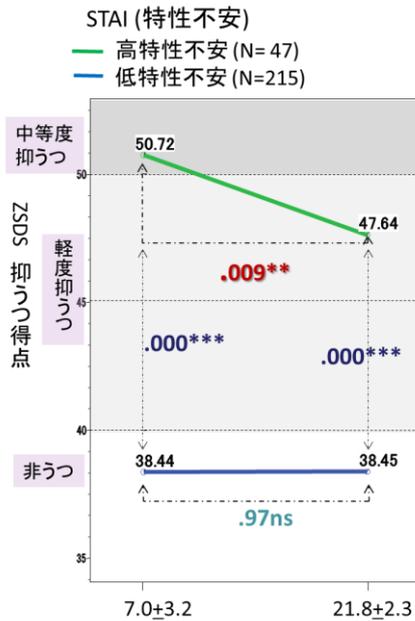


図 1.

STAI 特性不安高/低群の抑うつ推移

高特性不安群は産後期から分離期にかけて有意に抑うつが改善した。(中等度うつ→軽度うつ) 高特性不安群は低値群に比べ両期とも抑うつが高かった。状態不安についても同傾向であった。(図 1)

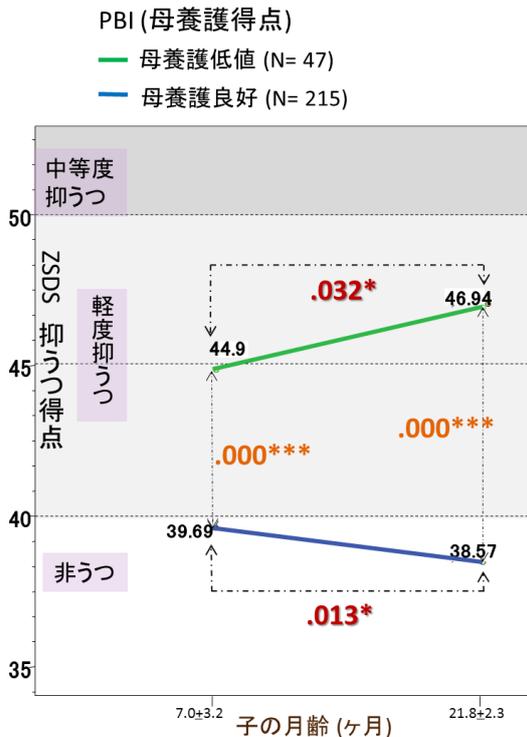


図 2.

母親養護 低/高群の抑うつ推移

PBI：母養護低値群は産後期から分離期にかけて有意に抑うつが増悪、母養護良好群では抑うつ得点が低下した。母養護低値群が良好群に比べ両期とも抑うつが高かった。その他下位尺度で、産後→分離期に差が見られた項目はなかった。(図 2)

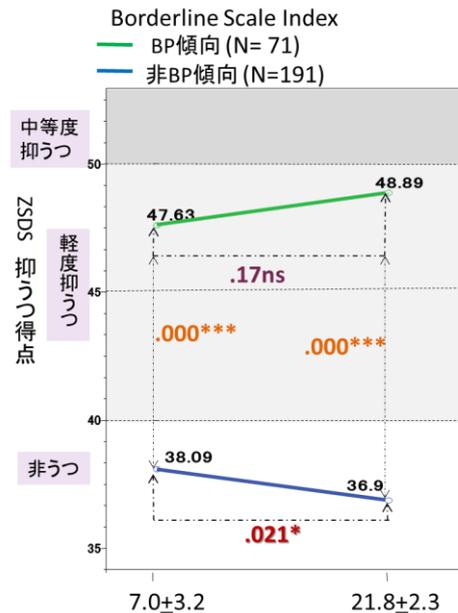


図 3.

BP 傾向/非 BP 傾向群の抑うつ推移

非 BP 傾向群は産後期から分離期にかけて有意に抑うつ得点が減少した。BP 傾向群が非 BP 傾向群に比べ両期とも抑うつが高かった。(図 3)

[考察]

a. 特性不安・状態不安

今回調査において高不安特性、または高不安状態の母親は産後期において高い抑うつを示し、分離期に有意に改善した。産後うつが神経症傾向、心配過剰傾向と強く関連するという先行研究結果と一致しており、これらの母親はこれまでから指摘された典型的な産後うつ群であると推測される。今回の調査で、これら高特性不安、高状態不安の母親の産後うつは分離期にかけて改善することが示された。

また、良好母親養護群、非 BP 群、母乳哺育群は抑うつが産後期から分離期にかけて低下していた。これらの母親は良好な bonding affect を持ちやすい心理特徴や環境を有しており、Winnicott が記載した「ほどよい母親 good enough mother」に近い特徴をもつ群であると推測された。Winnicott は

ほどよい母親について、「産後は育児行動に没頭し心理的過敏性が見られるが、子供の発達とともに密着した保護を徐々に手放していくごく普通の母親」と説明しているが、分離期にかけて抑うつが改善した今回の結果はこの記述と一致した。

b. 分離期の母親の抑うつ

育児期女性自身の母親からの養育体験が産後の抑うつがと関連するという結果はMcMahonの報告などと合致しているが、今回の所見は低い母親養護体験が抑うつを悪化させ、良好な母親養護体験が抑うつを改善させるという両群の抑うつ推移が明確になった点、そして2歳頃の長期にかけてその傾向を認めた点でより重要である。

一方、BP傾向と低い母親養護体験の関連が報告されている(Russ, 2003)が、今回の調査でも非BP傾向では抑うつが改善し、BP群は高い抑うつにとどまった。前項で述べたように「ほどよい母親」の抑うつは改善するが、一方の母親養護が乏しかった母親とBP傾向を持つ母親の抑うつが悪化、または改善しなかった背景はいくつか考察できる。

第1に、これらの母親が分離期に示す抑うつは子に対して感じる見捨てられ抑うつであると考察される。MastersonはBP傾向の母親が、分離期に個体化を試みる子に対し見捨てられ抑うつを感じる、と述べている。その背景について「子どものありのままを見ることができず、むしろ母自身の親などのイメージを投影してしまう」ことを挙げている。母自身の母親イメージや、母に陰性感情を抱く自己イメージの子に投影され、子の分離への動きが自分への攻撃、陰性感情に基づいた行動と捉えられ見捨てられ抑うつを呈するという、力動的背景の重要性が推定される。母親養護が乏しかった母親とBP傾向を持つ母親の産後うつは対になる群に比べて十分に高いが、分離期に比べて低かった。これは、産後期はこれらの母親がコーピング能力の乏しさなどから育児が大きな負荷となり、産後うつを呈しやすい一方で、母子が共生する時期であるため、彼女ら特有の自己と対象の境界の問題に悩まされる心配が少ないためとも推測される。

分離期の母親の抑うつ背景因子は、この力動的要因のほか以下のもので考えられる。第2に、ケアされた体験が乏しいため、子の分離行動に際し適切な養育方法がわからず、困惑や自信喪失感を強めるという要因。

(行動学習の側面) 第3に、Stepp(2011)は母親のBPDが子どもの感情や情動調律に影響を与えると述べているが、これら子への影響が徐々に表れ母親の抑うつにカウンターエフェクトを与えるという要因(母子相互作用の側面)。第4に、この時期の子が示す分離

の試み以外の正常発達の特徴、行動量の拡大や父子関係の深まりなどがこれらの母親の抑うつを促進するという可能性(その他の側面)である。

c. 臨床応用

産後の母親のサポートを行う際、幼少時の母親からの養護の程度が彼女らの抑うつ推移を予測する因子となる。不安特性が高いが十分な母親養護を受けていた母親は、産後うつを示しても子どもの1歳以降軽快していくと予測される。BP傾向がないこと、母乳哺育であることも産後うつが軽快することを示唆する因子である。これらの情報を提供することは、不安特性が強く将来について心配しやすい特徴を持っているこれらの母親にとって非常に有効であると考察される。

一方母親養護が乏しかった母親とBP傾向を持つ母親は抑うつが悪化または改善しないことが予測される。可能なら専門的な予防的介入(Macfie, 2009など)を行い、それらの介入を行えない場合でも、母親の孤立を防ぐ個別相談や、分離個体化を試みる子に対しての接し方のトレーニングなどを行い、見捨てられ抑うつを緩和するサポートを行うのが良いと考えられる。

[まとめ]

1. 育児期女性の抑うつ推移とその背景因子を探索した。
2. 幼少時に母親からの養護を十分受けていた、ボーダーラインパーソナリティ傾向がない、しかし不安特性が強い育児期女性は、産後うつを呈するが、子の分離個体化期までに改善していた。
3. 幼少時の母親からの養護が乏しかった育児期女性は分離個体化期に抑うつが増悪し、ボーダーラインパーソナリティ傾向のある女性は両期にわたって高い抑うつを示した。背景に子の個体化の動きに対する見捨てられ感情などの心理的要因が存在すると考察された。

5. 主な発表論文等
(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計1件)

1. Choi H, Yamashita T, Wada Y, Narumoto J, Nanri H, Fujimori A, Yamamoto H, Nishizawa S, Masaki D, Fukui K. Factors associated with postpartum depression and abusive behavior in mothers with infants. *Psychiatry and Clinical Neuroscience* 64(2): 120-127. 2010.

[学会発表] (計2件)

1. Choi H, Wada Y, Fujimori A, Yamamoto H, Nanri H, Yamashita T, Fukui K. A prospective study of postpartum depression and factors involved in its exacerbation, focusing on borderline personality trait and co-dependency. 4th World Congress on Women's Mental Health. 2011年3月18日, マドリッド.
2. 崔 炯仁, 和田 良久, 山下 達久, 藤森 旭人, 山本 春香, 南里 裕美, 北脇 城, 福居 顯二. 育児期女性における抑うつ の推移とその影響因子に関する研究. 第40回日本女性心身医学会学術集会. 2011年7月23日. 東京

[図書] (計4件)

1. 崔 炯仁. 周産期うつ病・更年期障害. 福居顯二, 井上和臣, 河瀬雅紀 編. うつ病 知る 治す 防ぐ. 金芳堂, 京都. 43-48, 2009.
2. 崔 炯仁. VII章 嗜癖行動障害 虐待/子ども. 福居顯二 編. 脳とこころのプライマリケア 第8巻 依存: 449-457. シナジー, 東京. 2011.
3. 崔 炯仁. 虐待. 福居顯二編. 専門医のための精神科臨床リュミエール 26. 依存症・衝動制御障害の治療. p218-227. 東京: 中山書店. 2011
4. 崔 炯仁, 福居顯二. うつ病性障害の心身医学. 石津 宏編. 専門医のための精神科臨床リュミエール 27. 精神科領域から見た心身症. p 123-131. 東京: 中山書店. 2011.

[その他]

ホームページ等

お母さんの不安とうつに関する調査ウェブサイト

<http://plaza.umin.jp/~mamkyoto/index.htm>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

崔 炯仁 (CHOI HYUNGIN)

京都府立医科大学・医学研究科・助教

研究者番号: 90398397

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし